

スラヴの紡織文化とその語彙の由来

佐 藤 規 祥

1. はじめに

スラヴ人がいつごろ、どのように機織りの技術と文化を発達させ、衣服を織りはじめたのかについては、これまでのところあまり明確なことがわかっていないようである。かりにスラヴ人の衣服の起源が、彼らが歴史的記録に現れる以前に遡るものであったとしても、それがどれほど古い過去から伝わってきたものであるかについては、議論されることがなかった。けれども、これはある意味もっともなことである。考古学的、民俗学的な視点に立つと、過去の遺物として発掘された物的証拠が一切残ることがなかったならば、何らそれについて知る術もないからである。

古教会スラヴ語で書かれた最初の文献が現れたのも、よく知られているように、やっと9世紀に入ってからのことである。そういった古い記録から得られる知識は、あるとしてもせいぜい衣服に関する限られた語彙くらいである。そうすると、遺物としても書記記録にもほとんど残される望みのない太古の時代の衣服については、何ら知る手掛かりが得られそうにならない。しかしながら、少し視野を転じてみれば、それを知る緒をつかめるのではなかろうか。

そこで、ひとまずスラヴ人の文化に限定せず、広くヨーロッパ中・東欧圏の文化において、どのように紡織文化が発達してきたのかについて考えてみることにする。

2. トゥムルス文化 (Tumulus culture)

詳しくは後の章で触れるが、ヨーロッパの一部の地域では、早くも新石器時代には機織りが始まっていたことを示す、物的な証拠が様々な形で得られる。そして、青銅器時代に至ると、中央ヨーロッパのおもにドナウ河中流水域を中心に繁栄したトゥムルス文化に、その技術が引き継がれ、さらに発達したことが認められる。このトゥムルス文化において発達した機織りの技術は、鉄器時代に入ってから次第にヨーロッパの各地に広まったらしい。

この意味では、原スラヴ人が移住、拡散し始める直前に居住していたと考えられているウクライナ北西部は、機織りの技術の浸透が遅れた後進地であったと言えるかもしれない。ただし、ここで注意しなければならないのは、トゥムルス文化が栄えた時代に、原スラヴ人が実際にどのあたりに居住していたのかについては、いまだに明確にはわかっていないという点である。そして、その当時の原スラヴ人の原郷地をどこに定めたとしても、いつの時代からか彼らがドナウ河中流水域に繁栄したトゥムルス文化の流れを汲む機織りの技術を採り入れたということは、まず疑いないと考えられる。

現時点でトゥムルス文化の担い手については、残念ながら十分にはっきりしたことはわかっていない。ただ、少なくともわかっている限りでは、インド・ヨーロッパ語族であることは間違いなさそうである。その後の鉄器時代にハルシュタット文化の担い手になったとされる、ケルト人との関係を否定することはできないが、実際には地域ごとに異なるそれ以外の種々の民族もまた、その文化に属していたと考えられている (Gimbutas 1965 p. 339, Sedov 2002 p. 47)。

そこで、まずはこのドナウ河中流水域を中心に繁栄したトゥムルス文化について、これまでに報告されてきている事実を概観してみたい。そしてそのあと、そこに関係付けられる民族または言語が、原スラヴ人またはその当時のスラヴ語と接触しえた可能性について検討してみたいと思う。

本論では、スラヴ人の原郷地の問題を主題としているわけではないので、この点に触れるのはできる限り控えておきたい。ただし、この問題に関して、前もって配慮すべきことがある。すなわち、もしかりに、スラヴ人のおおよその原郷地がしばしば推定されているように、カルパチア山脈より北東に位置し、ウクライナ北西部付近一帯にはるか古来よりずっと定住していたとすれば、トゥムルス文化の広まっていたドナウ河中流水域からは、はるか遠くに離れてしまうことになる。ということは、第一に、当地から機織りの技術がウクライナ北西部までに浸透するのは、やっと鉄器時代に入ってからになり、相当の時代のずれが生じることになるであろう。そして、第二に、トゥムルス文化圏に関係していたと推測される言語とは、その同時代に直接的に接触していた痕跡がスラヴ語の中に確認できないはずである。

他方で、もしかりに、その当時のスラヴ人の原郷地が、少なくともポーランド南部のシレジア地方より南か、もしくはカルパチア山脈よりも南西側のドナウ河中流水域のいずれかの地に位置していたとすれば、まさにそのトゥムルス文化の域内に入っていたことになる。ということは、第一に、スラヴ人にとっての機織りの技術は、この文化と同時代の青銅器時代に発達したことになるであろう。そして第二に、この文化圏に関係していたと推測される言語とも、その同時代に直接的に接触していたことを示す何らかの証拠が、スラヴ語の中に確認できるにちがいない。

上記のように仮定するならば、トゥムルス文化圏における機織りの技術が、当時のスラヴ人にどのように関係し得たかを解明することは、結論として、自ずとスラヴ人の原郷地の問題を再検討する可能性が生じるにちがいない。

3. 言語学的方法論

ところで、トゥムルス文化とは、そもそも考古学的な視点から定義されてきた概念である。他方で、この文化圏に関係していたと考えられる言語の特定は、比較言語学的な視点に立ってはじめて解明され得る論題である。

したがって、本論で明らかにしようとしている課題は、単純に一つの視点のみに立って検討することができないものであることを念頭に置かなければならない。その分、どちらの視点に立ってみても、矛盾なく説明することが求められる。

これまでのところ、この文化について知られている事実は、長年の考古学の成果によるものであるので、その事実に照らし合わせながら、言語学的事実を検討してみるのが妥当な方法であると思う。この場合、言語学的に期待される手段は、関連しえる言語間の語彙の比較・対応をすることであろう。すなわち、スラヴ語における紡織文化に関する語彙と、他の印欧語における対応する語とを語源学的な視点から比較することである。そして、スラヴ語におけるそれらの語彙を、どの言語がもっとも多く共有しているかに焦点が当てられる。この手順を経て、紡織文化に関する語彙の発達、スラヴ語と平行する形で観察される言語が特定されれば、そして、さらにその言語がトゥムルス文化圏内に関係付けられるとすれば、当時の原スラヴ語とその文化圏との間の関係も明らかになるはずである。同時に、それはスラヴ人が機織りの技術をいつどこで発達させたのか、という冒頭の疑問に対する答えを導くことになるであろう。

紡織文化の発達という、文化史的な論題を考古学と言語学というふたつのまったく異なる方法論を拠り所として、相互に矛盾なく解明するということは、決してそれほど単純で容易ではないことを認識しておきたい。

4. 機織りの作業工程

先史時代において紡織文化が発達した様相を、素材、作業工程、地域、時代ごとの変遷について、バーバーはその著書 (Barber 1990) のなかで、考古学的、民俗史学的な視点から、豊富な資料の提示とあわせて論考している。さらに別の研究でも繰り返しているが、語源学的な観点からも、ギリシア語における機織りに関する語彙の起源について、大変興味深い指摘をしている (Barber 1975)。本論においては、主としてバーバーの著書の記述に従い、紡織の作業工程とその素材、さらに中央ヨーロッパにおい

て考古学的な視点から得られる手掛かりについて、このあと概略的に論じたい。

人類史の中で衣服と呼ぶに相応しいものが、いつから現れたのかはわからない。しかし、衣服を着用するために織物が作られ始めたのは、どうやらやっと新石器時代に入ってからのことであつたらしい。それ以前は、おそらくもっぱら野獣のなめした毛皮を身につけていたと考えられる。この種の衣服は、織って作る技術が必要でないばかりか、編んだり、縫う技術も必ずしも要しなかったはずである。織物が出現するより以前に、編むか縫って作られた衣服が存在していたことを物的に示す遺物は、これまでのところほとんど確認できない。とはいえ、編んだり、縫って作られた衣服は、織物と比較するとはるかに古くから存在していたに違いない。

実は、「編む」と「縫う」作業に対して、「織る」作業のほうは、用途、素材、作業に要する用具の種類と数、作業にともなう手間と時間などいくつかの点で、ずいぶん性格が異なっている。

もともと「編む」作業は、樹皮からはがした鞣皮などを用いて、素手がかご状の容器を作る目的で行われていたことであろう。その要領で一種の原初的な衣服を作っていたという可能性は否定できない (Soffer et al. 2000 p. 512-519)。その作業にともなう手間と時間は、それほどたいしたことではなからう。中石器時代の紀元前 8,000 年期末のものとされるフィンランドにおける遺跡では、ヤナギの鞣皮を編んだ網が利用されていた。このほかにも、リトアニアの遺跡においては、紀元前 4,000 年期のものとされる、シナノキの鞣皮で編んだ網もまた発見されている (Barber 1990 p. 20, 41)。

また「縫う」作業の場合、原初的な段階でも骨針という用具が欠かすことができない。はじめのうち糸に代わる物は、樹皮か皮革を加工したひも状のものを利用していたのかもしれない。そして、当初は簡易的な家屋を覆う目的で、加工した皮革を固定するために行われていたと想像できる。衣服を縫って仕上げるのは、やっと細くて丈夫な鉄針の出現した時代になってからのことだったかもしれない。けれども、我々の想像をはるかに超えるような発見もある。ロシア、チェコ、オーストリアにおける、はるか後

期旧石器時代の27,000年前頃の遺跡からは、編んで作った帽子を表現したとされる粘土製のヴィーナス像が数多く発掘されており、実に興味深い(Soffer et al. 2000 p. 512-519)。もちろん、これが実際にどういったものであったのか、衣服もまた存在していたのかという疑問は残る。

これに対して、「織る」作業はまず疑いなく、衣服かまたはその一部を作る目的で行われる。糸として利用する素材は、植物性かまたは動物性の繊維から得られる。その作業に要する用具はもともと多かったが、その技術が進歩する度にさらに増加、複雑化してくる。そして、何よりも一連の作業にともなう手間がかかり、全ての工程を人ひとりで仕上げようものなら、かなりの日数を要したであろうと想像される。

そもそも機織りの作業は、その前段階において紡績という、それ自体が手間と時間のかかる作業なしでは成り立たないものである。紡績とはひとことで言えば、単に糸を紡ぐだけの作業である。だが実際の作業工程は、とくによく利用されるアマの場合、とても手間が掛かり、面倒である。はじめに、自然界にある植物かまたは栽培した植物（とくにアマ）を刈り取ると、まず一旦干す。そのあと、水に浸すかまたは戸外で露にさらすことで、繊維を得るのに不要な組織の部分を適度に腐敗させる。これが済むと、再びアマを干す。そして、叩きつぶして不純物を落とし、専用の櫛ですいて必要な繊維の部分のみを取り集める。そのあと、この繊維を紡錘に巻きつけ、そこから指で撚りをかけながら糸車に巻きとり、最終的に紡糸にする。したがって、紡糸が得られるまでにはいくつもの用具を用い、手順を踏んだうえで、ようやく仕上がるのである。この紡績の技術が、機織りそのものの発達の前提条件になっている。

実は、糸に用いる素材の代表的なものが、植物性ならアマで、動物性ならヒツジの毛であったことは注目すべき点である。どちらも内陸ヨーロッパにおいては、もともと自然界に存在していたものではなかったのも、アマは栽培植物であり、ヒツジは家畜であった。ということは、新石器時代における農耕・牧畜文化の基盤があつてはじめて、紡績の技術、文化が発達したということがわかるのである。

次の機織りの作業は、縦機（たてはた）か横機（よこはた）かという織

機の形態によって多少の違いがある。ただ、共通しているのは、はじめに織機の縦幅に長さをそろえた縦糸を、織機の横幅に適した必要な本数だけ張ることである。ついで、綜統（そうこう）で交互に二分した縦糸の隙間に、長い横糸を巻きつけて収めた杼（ひ）を左右交互に繰り返し通して織り込んでいくというものである。

横機は屋外で地面に杭を打ちつけて、織機が地面と対面するように、枠組みを水平に固定した比較的簡単なつくりのものである（Barber 1975 p. 300）。これに対して縦機は、屋内で枠組みを垂直に立てたもので、縦糸の一端におもりを付けて垂らすことで、糸の張りを一定に保った。それでも、初期段階の縦機はまだ単純なものであったらしい。それが次第に改良、複雑化し、座席をしつらえた織機も出現することになった。この類の織機が近年まで家庭用として一般に用いられるようになったものである。

こうして織りあがった生地は、縦糸の両端が横糸と絡み合っていないので、そのままではすぐにほどけてしまう。それを防ぐために、隣り合う数本の縦糸の先端部を巧みに編みこんで、房飾りにしていた（Barber 1990 p. 136）。房飾りにしない場合は、縦糸を生地に編み返して縁飾りとしていたようである。そのため、できあがった生地は、裁断も縫製もせず、そのまま身体に巧みにまとっていたと想像される。紡績と機織りという紡織の一連の工程は、このように複雑で、非常に手間の掛かる作業であった。このような技術は、おそらくある程度完成された形で、小アジアからバルカン半島を経て、中央ヨーロッパへと伝播したと推測される。

5. 素材

織物の紡糸に用いられる植物性の素材として最も一般的なものは、アマ（*Linum usitatissimum*）であった。ヨーロッパにおいてアマが利用されるようになったのは、新石器時代に入ってからのものであり、それ以前に野生のアマは利用されていなかったと考えられる。穀物を栽培する農耕文化の伝播と同年代に、アマも栽培されるようになったらしい。その茎から繊維を得るだけでなく、その実からは良質の油も採取され、大変有用な植

物であった。ヨーロッパ内陸部においてアマを利用した織物は、早いもので新石器時代の紀元前 3,000 年頃、スイスの湖畔に分布する杭上住居遺跡において確認されている。

アマについて重要な素材はアサ (*Cannabis sativa*) であった。アサを利用し始めたのはアマよりも遅く、知られている限りでは、青銅器時代後期から鉄器時代にかけてのことであった (Harding 2000 p. 255)。アサの繊維は織物にするよりは、縄や綱などに利用されることが多かったようである (Barber 1990 p. 15)。アサが利用されていた主たる地域は、とくにウクライナの乾燥したステップ地帯であった。おもにアマが利用されていた地域では、織物用の繊維としてのアサは、あまり浸透しなかったのであった。

アマ、アサ以外の素材としては、カシ、シナノキ、ヤナギの鞣皮が新石器時代におけるスイスの杭上住居遺跡で使用されていたことが知られている (Harding 2000 p. 255)。しかし、長い年代にわたって、最も広い地域で一般的に用いられたのはアマであった。

他方で、動物性の素材としていち早く利用されていたのは、ヒツジの毛、すなわち羊毛であった。羊毛はアマのように採取してから繊維を取り出すのに、手間が掛からない点で利用価値が高かったにちがいない。羊毛の織物は、デンマークにおける青銅器時代の遺跡の粘土層から多数発見されている (Harding 2000 p. 254)。上記のスイスの杭上住居遺跡においても、青銅器時代に入ると、羊毛が多用されるようになった (Harding 2000 p. 255)。また、縦糸にアマを横糸には羊毛が用いられた織物も発見されている。

ヒツジ以外の動物の毛も利用されることはあったが、羊毛ほどに広く一般的に用いられることはなかったようである。

羊毛は織物の他に、前 2,000 年期の青銅器時代にはフェルトとして利用されることもあった (Barber 1990 p. 221)。フェルト製作がいつ頃から始まったのか、定かではない。ただ、羊毛を利用するかぎり、早くても牧畜が開始された新石器時代以降のことであったにちがいない。また、フェルトは機織りの技術を必要としない。羊毛を縮絨して作られたが、衣服に

はあまり用いられず、装身具として利用されたのも帽子ぐらいに限られていたらしい (Barber 1990 p. 220)。

6. 最古の織物

土中では腐敗しやすい織物は、歴史時代において意図的に丁寧に保存されたものでもなければ、数千年前の遺跡の中から発掘されるということはほとんどない。そのため、かつて原スラヴ人が居住していた地域として考えられている、ウクライナやポーランドの遺跡において、織物の発掘例はこれまで知られていないようである。そのためもあってか、スラヴ人がいつから機織りを始めたのかについてこれまで議論されてこなかった。それに対して、スイスや南ドイツ、さらにデンマークの沼沢地においては、保存状態が比較的良好な織物の断片が多数例、新石器時代の遺跡から発見されている。これまでに知られる限りでは、それらがヨーロッパで最古の織物の現物であることになる。

スイスの杭上住居遺跡から見つかった、ふち飾りのついたアマ布の断片は、新石器時代の紀元前 3,000 年のものであった。この布切れは生地の手端がほどけないように、縦糸の余った先が組みひもにされ、実に巧妙に細工してある (Barber 1990 p. 136)。そのような技術がそこまで発達するには、すでに長い年代を経たに違いないことをうかがわせる。また、オランダ北部の遺跡からは、赤く染められた羊毛の織物が見つかっており、中期青銅器時代の紀元前 1,300~1,000 年頃のものとなっている (Barber 1990 p. 184)。これとほぼ同時代のトゥムルス文化期 (紀元前 15-13 世紀) にあたり、ドイツのチューリンゲンにあるシュワルツァ (Schwarza) 遺跡では、実に貴重な遺物が発見されたことが報告されている。そこからは女性用の羊毛の生地の手端の断片が、数々の装身具とともに発見され、その当時の女性がどのような形状の衣装を身に付けていたかを詳細に知ることができる (Gimbutas 1965 p. 288-289)。

鉄器時代の前 1,000 年期初頭には、オーストリアを中心にスイス、南ドイツにハルシュタット文化が興隆した。これはケルト人の文化であること

はまず間違いなさそうであり、彼らはそこからさらにブリテン島にまで移り住んで、自らの文化を広めたのであった。このハルシュタット期の織物で最も目立った特徴は、綾織りと格子柄であった (Barber 1990 p. 186)。ほぼ同時期、前 2,000 年期末の青銅器時代にあたるスウェーデンでも、同じく綾織りの羊毛製の外套が見つかっている (Barber 1990 p. 193)。この他にデンマークやアイルランドにおいても綾織りの織物が見つかっている (Harding 2000 p. 263)。南方ではイタリアにおいても後期ヴィラノヴァ文化 (前 1,000 年期中頃) の墓中で綾織りの布切れが発見されている (Barber 1990 p. 194)。この綾織りの技術もまた、ハルシュタット文化に起源を発していると解釈されている。これと同じく、鉄器時代初頭のイタリアにおける機織りの文化が、中央ヨーロッパの文化と結び付けられる興味深い例は、このほかにも多数見られる。

新石器時代 (紀元前 3,000 年頃) のスイスに起源を発する縁飾りの技術は、青銅器時代を経て鉄器時代のハルシュタット文化においても好まれた特徴であった。この縁飾りの技術は、鉄器時代の北イタリアにおいても見られ、さらにローマ時代の衣装にも受け継がれていったのである (Barber 1990 p. 194)。

鉄器時代の織物は、オーストリアのハルシュタットにあった塩坑で多数発見されている。湿気を吸う乾燥した塩坑の中では、織物が腐敗することもなく、よく保存されたのであった。

このように、ハルシュタット期の機織りの文化は、遠くブリテン島やスカンジナビア半島さらにはイタリアにまで及んだのであったが、スラヴ文化にもその影響がもたらされたという証拠は、少なくともこれまでのところ知られていない。当時のスラヴ人はハルシュタット文化の影響を直接受けない土地に居住していた、ということを意味していると思われる。

ヨーロッパ外では、小アジアのチャタル・ヒュユク遺跡から前 6,000 年期始め頃のものとされる、炭化して素材の判明しない織物が出土したことが知られている。バーバーの説では、紡織文化はここからヨーロッパへと渡り、紀元前 5,500 年までにドナウ河中流域とその支流であるティサ河流域で使用され、4,000 年紀末になって西はスイスで、北はポーランド南部

で定着したということである（Barber 1990 p. 249）。ヨーロッパに入った当初から、その素材には植物繊維（アマ）と羊毛とが利用されていたらしい。

7. 間接的に知る手掛かり

織物そのものが遺跡から発掘されるということは、非常に例外的なことであるし、それが発見されなかったからといって、その当時に機織りが行われていなかったとは断言できない。実際に織物が作られていたことを示す手掛かりは、まだ他にもいくらか指摘することができる。例えば、織機や紡績に用いられる器具は、そのことを証す価値ある遺物になり得る。

けれども、木製の織機そのものが発掘されることは、ほとんどない。ただまれな例として、初期青銅器時代のウーニェティツェ（*únětice*）期におけるチェコのプロスチェヨフ（*Prostějov*）近郊にあるフラチャニ（*Hradčany*）遺跡においては、焼けた縦機の残骸が縦糸のおもりとともに発見されたことが報告されている（Gimbutas 1965 p. 250）。このほか、イタリアのアルプス地方のナクワーネ（*Naquane*）遺跡では、如実に描かれた縦機の絵が発見された。この遺跡の年代は後期青銅器時代か初期鉄器時代に属するらしい（Harding 2000 p. 257, 260）。

紡績に用いられる糸車は、ハンガリーにおける青銅器時代の遺跡で豊富に発見されている（Harding 2000 p. 256）。しかし、紡織器具の中でも発掘例のもっとも多いのは、縦機に用いられる縦糸を吊るすための粘土製のおもりである。ハンガリーやチェコにおいても、初期青銅器時代の遺跡から縦機用のおもりが見つかっている。さらに、低地オーストリア、スイス、ドイツのチューリンゲン、オランダ、北イタリア、ポーランド、南部イングランドなどの各地における幅広い時代の遺跡から、糸の太さに合わせた多様な形状と大きさのおもりが見つかっている（Gimbutas 1965 p. 273, 289; Harding 2000 p. 258-260）。

織物の生地や紡いだ糸が発見されない遺跡でも、その素材として栽培されたアマが遺物として残ることがある。この点では、栽培植物の古民俗植

物学的な視点からの調査、研究が、貴重な資料を提供している (Renfrew 1973 p. 120-124; Zohary & Hoff 1988 p. 114-119)。その地図に示されるように、ヨーロッパにおける野生種のアマ (*Linum bienne*) は、主として地中海の沿岸部の湿った土地に自生している (Zohary & Hoff 1988 p. 117)。内陸では南フランスなどほとんど自生するところが限られている。これに対して、栽培種のアマはドナウ河に沿って、セルビア、オーストリア、スイス、ドイツ、そしてさらにオランダ、イギリス、イタリアなどに拡散している (Zohary & Hoff 1988 p. 120)。

栽培種のアマの種子は、野生種に比べて大粒であることで区別される (Renfrew 1973 p. 122-123)。それゆえに、内陸部の遺跡で発見されている大粒のアマの種子や蒴果 (さくか) は、野生種ではなく、その繊維を得るために栽培されていたという可能性が高い。

ヨーロッパで最古の栽培種のアマは、新石器時代におけるギリシアのセスクロ遺跡 (前 6,000 年) で発見されたものである。そのあとは、ドイツ各地における前 5,000 年紀の新石器時代の遺跡で発見されている。さらにそのあとの前 4,000 年紀には、オーストリア、スイス、セルビア、イングランドの遺跡で発見例がある (Renfrew 1973 p. 120)。これらはいずれもアマの種子または蒴果の押圧痕が、炭化して残ったものである (Renfrew 1973 p. 120-122)。さらに前 3,000 年紀にはイタリアのアルプス地方のラゴツァ (Lagozza) 遺跡において、焼けて炭化したアマの種子と蒴果が見つまっている (Zohary & Hoff 1988 p. 120; Renfrew 1973 122-123)。すでに青銅器時代に入った前 2,000 年紀には、ドイツ南部のブハウ (Buchau) 遺跡において、多種の栽培植物とともにアマも栽培されていたことがわかっている (Gimbutas 1965 p. 303)。

他方で、ポーランド、ドイツ東部、デンマーク、スカンジナビアでは、前 1,000 年紀にはいるまでアマの種子の発見例がない (Renfrew 1973 p. 121-122)。つまり、スラヴ人の原郷地の一候補として関連付けられるポーランドでは、鉄器時代のラウジッツ文化期に入るまでアマの発見例は報告されていないのである。この事実はとくに注目に値する。ラウジッツ文化に平行して、その南ではハルシュタット文化が興っていたのである。

アマの栽培は、新石器時代に農耕文化が拡散したのと同時に、バルカン南部からヨーロッパに入り、ドナウ河沿いに北上して中央ヨーロッパに至り、青銅器時代になってからさらにそこから周辺地域に広まっていった。

このように、アマが栽培されていったことを示す土地が、アマ布の断片が発見されている遺跡の分布にも、時代的にもほぼ一致していることから、アマの栽培が紡織文化とともに広がっていった、と仮定するのが妥当である。ただし、アマの種子からは豊富な油分が採れ、食用にすることもできるので、当初からその茎の繊維のみを利用するためだけに栽培していた、と断言することはできない。炭化したアマの遺物が発見されていることから、それは容易に推測できる。

以上の諸々の事実から明らかなように、紡織文化はすでに新石器時代にヨーロッパ中部のドナウ河中流付近のオーストリア、南ドイツ及びスイスで始まっていた。これが青銅器時代に入ってから、さらにそれより北方、西方、南方の各地に次第に拡散して行ったのであった。したがって、少なくとも知られている限りでは、ポーランドやウクライナは、青銅器時代においてもその文化の範囲内に含まれていなかったことになる。

8. ドナウ起源説

紡織文化の論題とはまったく別に、ロシアの考古学者セドフは、考古学的な視点からスラヴ人の原郷地の議論を展開してきた（Sedov 1979, 2002）。彼の提唱している仮説は、スラヴ人にとっての紡織文化の起源を考えるうえでもとくに興味深い。これまで一般に受け入れられてきているスラヴ人の原郷地は、およそカルパチア山脈の北東、ウクライナの北西部からポーランド南東部にかけてのやや小高い土地である。ところが、セドフがスラヴ人の原郷地と推定している土地は、それよりもはるかに南西で、ドナウ河に北から流れ込む支流域に位置しているのである。

セドフの仮説は、少し補足説明を加えると以下のとおりである。青銅器時代の紀元前 14-13 世紀、ヨーロッパ中部のドナウ河中流域をほぼ南限として、北はポーランドのオーデル河流域、西はライン河中上流、東はハン

ガリーのティサ河，に至る広大な地域にはクルガン文化（ギンブータスの言うトゥムルス文化）が繁栄していた。このトゥムルス文化は，先行するウーニェティツェ文化との連続性が見られ，また，さらに後続するアーンフィールド（Urnfield）文化に受け継がれていった（Sedov 2002 p. 43-44, Gimbutas 1965 p. 245）。

この文化には，ゲルマン，ケルト，イタリック，イリュリアの各語派に属す言語を話す民族とともに，スラヴ人もまた属していたとされる（Sedov 1979 p. 44）。ただし，それ以前の原スラヴ人がどのあたりに居住していたかは，何らわかっていない。

そして，鉄器時代初期のアーンフィールド期（紀元前 1,300 年）には，その北東部では一つの民族言語グループが形成されていた（Sedov 2002 p. 58）。これは，オーストリアを中心に興隆したハルシュタット文化の影響を受けず，ラウジッツ文化と称するものであった。中心域のヴィスワ，オーデル河間，チェコのラベ河上流からスロヴァキア北部に至る地域を占めていた。セドフは早ければすでに，このラウジッツ文化を原スラヴ人が担っていたのではないかと考えているようである。

紀元前 1,200 年頃になると，このラウジッツ文化民は，さらにヴィスワ河とドニエプル河，ドニエストル河との分水嶺にまで東進していた（Sedov 2002 p. 59）。紀元前 550 年頃になると，ポーランド北部におけるポモルスカ文化の住民がラウジッツ文化圏内に移住し始めた。その結果，紀元前 400～100 年の間，ヴィスワ河中上流とオーデル河中流の間にポトクリョシ文化が形成された（Sedov 2002 p. 70）。紀元前 2 世紀になると，このポトクリョシ文化に南方のケルト人の影響が最大に達し，そこから新たに続くプシェヴォルスク文化へと変容していった（Sedov 2002 p. 88）。このあと次第に東南方向に移住し，最終的にウクライナ北西地方へと領域を拡大していったのである。

以上のように，セドフの説によると，原スラヴ人は時代を経て次々と居住地を移し，その度に隣接する民族が入れ替わり，最後にウクライナ北西部にやってきたことになる。このように彼は原スラヴ人の原郷地をドナウ河流域に推定していることから，「ドナウ起源説」と言われる。

セドフの仮説は、今日でも決して広く一般に支持されているものではない。しかし、スラヴ人の織物文化の起源について考えた場合、うまく説明できるのではないかと思う。また、彼の考古学的な視点からの論考は、言語学的な視点からトゥルバチョフによって独自に検討されてきた仮説とも、同じ結論を得ている (Trubachev 1982, 1985)。

機織りの技術がドナウ河中流域のトゥムルス文化から原スラヴ人に伝わったのが、かりに鉄器時代より後のことだったとすれば、彼らのその頃の原郷地は南部を除いたポーランドかウクライナにあったと考えていい。けれども、かりにそれが早くも青銅器時代のことであったとしたら、少なくともその当時の居住地は、ポーランド南部のシレジア地方以南に位置し、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーなどがその候補となり得る。考古学的な視点から、機織りの発達とスラヴ人との関係について概ね言えることは、上述のとおりである。

本論では、原郷地の議論それ自体にこれ以上立ち入らないようにする。ただ、この先はセドフ説ならびにトゥルバチョフ説を念頭において、織物文化の起源について考察したい。

9. 言語学的方法論

考古学的方法論では、各地の遺跡から出土した遺物、遺構等を調査、研究することによって、一つひとつの文化の正確な年代とその領域について確定することができる。主としてこの方法は、文化の物質的な側面に着目したものである。ただしそれゆえに、織物のように腐敗して遺物として残らなかったものについては、不明な点も少なくない。

それに対して、言語は文字記録として残っていなくても、比較言語学ならびに語源学的手法によって、過去に失われた語彙的な情報を探り、これを再現することができる。そこで、スラヴ語に継承されている紡織文化に関連する語彙を語源学的に調べると、それらが形成された相対年代と文化的背景が分ってくる。

紡織文化に関する語彙は、その技術を獲得してはじめて形成される文化

語彙である。これは、どの言語にも本来備わっているような身体部位、家族構成、自然環境、基本動作などを意味する基礎語彙とは、まったく異なった性格を有している。

したがって、スラヴ語における紡織関連の語彙の語源を調べれば、それらに対応する語彙を共有している言語との間で、言語接触があったと仮定することができる。この仮説に基づいて、スラヴ人がどの年代のどの地に居住して、それらの語彙を発達させたのかが解明されるはずである。

こうした手続きによって、トゥルバチョフはスラヴ語の紡織語彙がゲルマン語やとりわけイタリック語派に属するラテン語の語彙によく対応していることを指摘したのであった。彼はこれらの語彙以外にもさらに冶金術や建築術に関する語彙の語源についても探求し、それらも同様にゲルマン、イタリック両語派との間に対応するひとまとまりの語彙を見出した。トゥルバチョフの説によると、これらの事実はスラヴ語がかつてゲルマン語派とイタリック語派との間で緊密な言語接触があったことを意味しているという (Trubachev 1966)。さらに、その他のいくつかの言語学的事実をも考慮に入れたうえで、スラヴ語の原郷地はチェコに位置付けられると主張した (Trubachev 1982, 1985)。彼の提示する説を裏付ける語彙の数は、あとでも見るように決して多くはないが、それでもそれらは単なる偶然の一致として片付けられるものではない。

スラヴ語がゲルマン語との間で密接な関係があったというのは、今さらとくに驚くべきことではない。けれども、イタリック語派との間でも、多方面の文化語彙が示すように、同様の関係があったという指摘は注目に値する。ただし、それだからといって、スラヴ語の原郷地をただちにカルパチア山脈よりも南方で、しかもはるかに西の土地に位置付けるという大胆な説は、反論されることはあっても、残念ながら、今日に至るまで受け入れられることはなかった。

それでも、スラヴ語における紡織文化に関する語彙の多くが、ラテン語に対応するという事実は、過小評価することはできない。トゥルバチョフが検討した実例は、スラヴ語の側から見たおもに紡績と機織りの技術に直接的に関連する小数の語彙例に限られていたのであった (Trubachev

1966)。そのために、例が少ないという点では説得力にやや欠けていたと言えるかもしれない。もし、その説が正しいのであれば、指摘されている語彙の他にもまだ、スラヴ=イタリックの等語線内に入る語彙例があるはずである。

そこで、まずトゥルバチョフによって指摘されたスラヴにおける紡織語彙の対応例がどのようなものであるか、この後でひと通り簡単に引用したい。

10. トゥルバチョフによる紡織文化の語彙対応例

対応例ははじめにスラヴ祖語の語形を示し、そのあとに想定される語義を記す。そして、つぎに現代語の語形を示す。それぞれの語義は祖語のそれと同一である。スラヴ語の実例のあとで、それらに対応するラテン語の語形と語義を示す (Trubachev 1966)。なお、理論的に想定される語形のいずれにも、周知の約束事としてアステリスク (*) を前に付す。

- (1) *tǫrdlo 「亜麻を梳く道具」 チェコ語 trdlo // ラテン語 tribulum 「脱穀用の道具」
- (2) *kostra 「亜麻の梳きくず」 ロシア語 костра // ラテン語 castrum 「壕のある土塁」
- (3) *verteno 「紡錘」 ロシア語 веретено // ラテン語 verti-cillus 「紡錘の台」
- (4) *nitъ 「糸」 ロシア語 нить // ラテン語 nētus 「紡糸」
- (5) *klqbъ 「紡糸の球」 ロシア語 клуб // ラテン語 glomus 「糸球」
- (6) *stativъ 「織機」 ウクライナ語 статива // ラテン語 stativus 「固定している」
- (7) *ščapъ (〜*cěpъ) 「綜統 (そうこう)」 スロヴァキア語 ciepy // ラテン語 scapus 「心棒」
- (8) *sědadlo 「織機の座部」 カイ方言 sedalu // ラテン語 sediculum 「座席」
- (9) *spinъ 「紡錘の先」 ウクライナ語 спінь // ラテン語 spīna 「針」

以上の通りである。ここではトゥルバチョフが説明している個々の語義の変化の過程について、とくに深く論じるつもりはない。しかしながら、中には *kostra 「アマの梳きくず」がラテン語の castrum 「壕のある土塁」に対応しているというように、語形の対応に全く問題はないけれども、その語義の変化の説明にはやや納得しがたいものもある。それ以外の例は、見ての通り接尾辞に至るまで、見事に対応していることがわかる。

このように、いずれも共通の接尾辞をもつ厳密な対応を示す語彙だけに焦点を当てようとしたのであった。したがって、これらの語彙だけでは少ないという印象は確かにある。だが、もちろん紡織関連以外にもスラヴ語の語彙が、ラテン語にのみ対応する例はトゥルバチョフが各所で指摘している (Trubačev 1975, 1982 p. 18)。議論が脇にそれてしまうので、それらの例をここでは引用しない。

ただひとつ興味深いのは、いずれの対応例を見ても、スラヴ語と最も関係が密接で、共通語彙も豊富なことで知られるバルト語の対応例は、それらの中にほとんど入って来ないという点である。すなわち、これはスラヴ語がイタリック及びゲルマンの両語派と言語接触していた時代には、バルト語とは接触していなかったと説明される。この事実もまた、スラヴ語の原郷地の問題を再検討させる動機付けとなり得る。

上記のように、トゥルバチョフ説の拠り所となっている紡織文化の語彙は、確かに少数ではあるが、スラヴ語における紡織文化の語彙そのものの全体数が、引用例も含めてそう多くないのも事実である。引用例で示したように、トゥルバチョフの考えた紡織文化の語彙とは、紡績と機織りの作業工程において直接的に関連しえる用語に限定されていた。用語を厳密に定義するという目的は、これで果たされているのであるが、もう少し視野を広げる余地もある。なぜならば、機織りは単に織物を織るだけでなく、最終的に衣服を製作し、着用することを当然の目的としているからである。その意味で、服飾とそれにとまなう装身具に関する語彙までも含めて、広い意味での紡織文化全体の語彙として検討することが望ましいと思われる。そこでこのあと、我々はトゥルバチョフによって指摘されなかった紡績と機織りに関する若干の語彙を補足し、さらに服飾、装身具に関する語彙を

新たに付け加えて検討してみたい。

11. 紡織文化語彙の対応例

これ以下においては、織物が製作される工程に従って、紡績、機織り、服飾・装身具の順に分類して、スラヴ語におけるそれらの語彙の対応例を示す。各項目において、はじめにスラヴ祖語に想定しえる語形（場合によっては複数の語形）とその語義を記す。その語形は、現在も刊行途中のスラヴ諸語語源辞典 (ESSJa 1974-) に見出し語として示されている姿を基準とするが、それが欠けている大部分の場合は、筆者自らが与えた語形である。そのあとで、現代語の語形と語義を記す。そして、さらにそれらのあとラテン語の語形と語義を記す。もしさらに、これらに対応する語が他の言語にもあれば、それを続けて記すことにする。

語源学的な解釈はスラヴ語の側面から見ている。上記のスラヴ祖語の語源辞典を参考にしたが、まだこれに収められていない語は、ロシア語語源辞典 (Vasmer 1986) を参照した。また、つねに語源解釈には様々な解釈がありえるので、ラテン語の語源辞典 (Walde & Hofmann 1982) およびその文法書 (Leumann, Hofmann & Szantyr 1972) も参考にした。語源についてはとくに必要のない限り、あえて辞典からの引用箇所を記さないことにする。

紡績に関する語彙

(1) *palъсь 「親指」 (<*pōlikis)

ロシア語 палец 「指」、セルビア・クロアチア語 palac 「親指」、スロヴェニア語 palec 「親指」、チェコ語 palec 「親指」、ポーランド語 palec 「指」
// ラテン語 pollex, -icis 「親指」

スラヴ語とラテン語の双方で平行した語形の発達が見られる。どちらも語根が接尾辞 *-k- (>スラヴ祖語 *-c-) によって拡張されている。スラヴ語の接尾辞 *-ьс- は、よく知られた生産的な指小辞の働きを担っていない。この接尾辞のない形は、形容詞化した派生語にのみ見られる。ロシア語の

語源辞典 (Vasmer 1986) には бес-пал-ый 「指の欠けた」; шести-пал-ый 「六本指の」 (<*palъ) の例があがっている。接尾辞のある語形もスラヴ祖語の古層において形成されたものであり、ラテン語の接尾辞との一致も単なる偶然とは考えられない。

ただし厳密に言えば、語根の母音度 (スラヴ祖語では長母音化) が異なっているのと、ラテン語では起源不明の重子音化 (-ll- < ?*-ln-) している点で、相違を指摘することができる (Walde & Hofmann 1982)。

また、両語派とも語義がとくに「親指」を意味している、という点でも一致している。語義からのみ判断すれば、単なる身体部位を表す基礎語彙のひとつに過ぎないように思われる。スラヴ語で「指」を意味する語は、ふつう祖語の *pьrstъ に由来する語 (>ロシア語 перст) が用いられる。単に「指」を意味する語ではなく、とくに「親指」を意味する語が形成されたのは、その語が必要になった文化的背景や生活状況があったからであろう。

この語は一見、紡績語彙とは関係なさそうである。けれども、当時の手作業による紡糸工程においては、親指の器用な使い方が、作業効率を上げるうえで大きな役割を担っていたと推測される。とりわけ紡糸を巻きあげる作業では、片方の (左) 手で糸を巻き取りながら、もう片方の (右) 手の親指では、手際よく糸に撚りをかけていく必要がある (Barber 1990 p. 43)。紡績の工程の中でも手間の掛かる作業であったので、それだけに素早く質のよい仕事が、とりわけ「親指」を器用に使う紡ぎ手に求められていたのかも知れない。

こういった意味で「親指」は、糸を紡ぐ技術に大きな役割を果たし、それゆえに特別な語彙が形成されたと考えられる。

(2) *sьkati, *sьkq 「撚り合わす」, *sučiti 「撚る」

ロシア語 скати, ску 「なう, 撚る, 紡糸を巻く」, сучить 「撚る」, チェコ語 skát 「撚る」, soukati 「なう」

// ラテン語 sucula 「巻き上げ機」

// リトアニア語 suku, sukti 「巻く」

この動詞は前の名詞 *palъcъ「親指」と実際の使用状況において密接に関連している。スラヴ語には原義に推定される「糸を撚る」を意味する動詞があるが、ラテン語では対応するはずの動詞が失われ、接尾辞 -ula を伴なって派生した名詞のみが残る。

ラテン語の名詞の語義は、糸を撚る工程において指で撚りをかけた紡糸を巻き上げる器具「綯 (かせ)」を意味していると考えられる。名詞に内在する「巻く」の意味は「撚る」からそのまま意味が転じたのではなく、撚りをかける作業で用いられる器具「巻き上げ機=綯」が糸を「巻く」動作に由来するものであろう。

(3) *žica「獣毛の糸」、*žila「腱、血管、動物性の繊維」

ロシア語 жила「腱、血管」、セルビア・クロアチア語 žila「血管、繊維」、スロヴェニア語 žila「血管」、チェコ語 žila「血管」

ロシア語 жица「色のついた毛糸」、セルビア・クロアチア語 žica「糸、弦」

// ラテン語 filum「糸」

// リトアニア語 gija「縦糸」、gýsla「腱、血管」、ラトヴィア語 dzija「縦糸」、dzisla「血管」// ウェールズ語 gi「神経」// 古代インド語 jiyā「弦」// アルメニア語 jil「腱」

スラヴ語の *žila は、ラテン語の filum によく対応しているように映る。しかし、filum は接尾辞 *-slom を伴った形が変化したもの (<*fi-slom < *gwhi-slom) と考えられ、むしろバルト語の語形に対応している (Walde & Hofmann 1982)。

トゥルバチョフが指摘しているように、スラヴ語で糸を意味する語は、祖語で *nitъ に由来する語 (>ロシア語 нить) が用いられる (Trubachev 1966 p. 101)。これは、もともとアマなどの植物性の繊維から紡いだ糸を指していたらしい。ヒツジをはじめとする動物の毛を紡いだ糸は祖語で *žica が用いられ、前者と区別されていたらしい。

語形の特徴に限って判断するならば、「獣毛の糸」よりはアマを代表とする「植物性の糸」*nitъ のほうが、ラテン語 (nētus) に近い関係を示

していると言える。両語派には、糸を意味する語に二種の区別があるという点が、互いの関係を近づけている。

機織りに関する語彙

(4) *ligati 「縦糸を通す (?)」

ウクライナ語 *лигати* 「牛の角に縄をかける」さらに接尾辞のついた動詞として、ロシア語 *лигозить* 「織り糸を絡ませる」

// ラテン語 *ligō, -āre* 「結びつける」

// リトアニア語 *laigonas* 「妻の兄弟」// 中期低地ドイツ語 *lik* 「包帯」

スラヴ語では痕跡的に保持された語である。他方のラテン語では、接頭辞のついた動詞が多く派生した。スラヴ祖語では「縦糸に横糸を通す」が原義であったのではなかろうか。ラテン語では、おそらくこれと同じ意味が単に「(糸を) 結びつける」ことを表すようになったと考えられる。リトアニア語では妻との結婚によって、あたかも横糸を通すかのように親戚の横の関係、つまり妻の兄弟ができることを意味するようになったと解釈できる。

(5) *laḥa, *laḥъ, *laḥmy, *laḥonъ, *loḥm-y, *loḥonъ, (< *lāks- ~ *loks-), *loskutъ 「ぼろきれ, ぼろ服, 古着<布切れの房飾り」

ロシア語 *лах, лахон, лахмы* 「ぼろきれ」, *лохмы* 「髪・生地 of 房, ぼろ布」*лохон* 「古着」, *лоскут* 「切れ端」, ポーランド語 *łach* 「ぼろ服」

// ラテン語 *lacer* 「破れた」, *lacinia* 「布のふち縫い」, *lacero, -āre* 「破る」

// ギリシア語 *lakis* 「ぼろ」// リトアニア語 *laskatas* 「切れ端」

スラヴ語では、中でもとりわけロシア語では、いくつもの派生形式が二次的に発達している。いずれもそれらは、語根の *lok- に接尾辞 *-s- で拡張された形 *lok-s- (> *lox-) から形成された。この接尾辞はラテン語には現れないが、接尾辞 *-n- で拡張された形態は、双方に共通している。

語義の変化は一見したところ問題なさそうである。ラテン語における動詞の「引き裂く, 破る」が原義であるとすれば、それから派生した名詞に

スラヴ語で「破れた服, ぼろ, 古着」の意味が発達したように思われる。けれども, スラヴ語の *loxm- 「生地 of 房」とラテン語の lacinia 「房飾り」の意味の発達には, 別の説明が必要になる。

生地 of 縁飾りは, 早くも新石器時代後期におけるスイスの杭上住居遺跡から出土した織物生地 to すでに見られるものであった。それ以来, 織りあがった生地 of 縁は, 縦糸 of 端を編み返し, 糸を数本束ねて巧みな房飾りにしたのだった (Barber 1990 p. 136-137)。こうすることで, 生地 of 端がほつれたり, 破れるのを防いだのであった。それでも, 長年, 着用して着古した服は, 生地 of 端からほつれたり, 破れたにちがいない。本来は, 祖語で生地 of 端 of 房飾りを意味していた名詞が, スラヴ語では「房飾り」>「(房飾りの) ほつれた服」>「古着」>「ぼろ布」と意味が次第に変化していったと解釈される。

他方 of ラテン語では, 名詞とは別にその形容詞「生地端 of ほつれた, 破れた, ちぎれた」の語義が変化, 発達し, 動詞はむしろ形容詞から派生したと考えられる。

(6) *blizna 「織り糸が切れること」

ロシア語 близна 「傷跡, 機織りの途中で 1, 2 本の縦糸が切れてなくなること」, セルビア・クロアチア語 blizna 「傷跡, 織り糸が切れること」, チェコ語 blizna 「あざ」, ポーランド語 blizna 「傷跡」

// ラテン語 fligō, -ere 「ぶつかる」 (<*bhlig'w-)

// リトアニア語 blyžè 「織物の破れ」, ラトヴィア語 blaīzīt 「ぶつかる」

// ギリシア語 phlībō 「押しつぶす」

音韻対応における問題はない。スラヴ語では接尾辞 *-n- を伴う名詞だけがあり, 動詞は失われた。ラテン語では動詞だけがあり, 名詞は派生していない。両者に関係付けられるのは, 祖語に想定されえる動詞とその語義である。しかし, ラテン語 of 動詞 of 語義は, とくに機織りとの関係を示してはいない。かりに原義において, 「縦糸が切れる」ことを意味していなかったとすれば, 機織りと関係付けるのには無理がある。それとは別に, スラヴ語における名詞とその意味は, 他 of 紡織語彙と同時期に発生し

たものであるかもしれない。

服飾に関する語彙

(7) *jъz-uti, -ujq 「(下着・靴を) 脱ぐ」

ロシア語 из-уть 「靴を脱がせる」, セルビア・クロアチア語 izuti, スロヴェニア語 izuti, チェコ語 zouti, zuji 「靴を脱がせる」

// ラテン語 ex-uo, -ere 「(服を) 脱ぐ」

// リトアニア語 auti, aunu 「(靴を) 履かす」, ラトヴィア語 aut 「靴を履かす, 服を着せる」 < *ew- 「服を着せる, 着ている」

どちらも同じ接頭辞を伴う動詞で対応している。リトアニア語に見られるような接頭辞がない動詞は, スラヴ語には欠けている。スラヴ語では一般に服ではなく, 下着やとりわけ靴に限って「脱ぐ」の意で用いられるようになった。

(8) *ob-stegъ/-a, *ob-stežъ 「衣服」, *ob-stegnŋti 「? 縫い付ける」

ロシア語 остер, остежь 「衣服」, チェコ語 ostěh 「服」, ポーランド語 ścieg 「針目」, 教会スラヴ語 остеръ, остежа 「衣服」, チェコ語 ostehnouti 「縫いつける」

// ラテン語 toga 「トガ」 「(一般に) 衣類, ローマの自由民の男性が着る上着, ある程度半円状の羊毛の布でできていた」 tego, -ere 「覆う」, ob-tego, -ere 「覆い隠す」, teges, -etis 「屋根」

// 古期高地ドイツ語 dah 「屋根」, decchin 「覆う」 // 古アイルランド語 tech, teg

// リトアニア語 stogas 「屋根」 // ギリシア語 (s)tegos 「屋根」 (<stego 「覆う」)

スラヴ語では接頭辞 *ob- を伴った形の名詞だけが存在する。さらに, これと同じ接頭辞が付いた形の動詞も存在している。ラテン語では, これに対応する接頭辞が付いた動詞 ob-tego 「覆い隠す」が見られる。また, ギリシア語と同様にスラヴ語では, 起源不明のいわゆる s-mobile が現れている。ただし, どちらの特徴もラテン語の名詞との対応において, とく

に問題はない。

さらに、両語派にのみ見られる語義の平行した発達は興味深い。スラヴ語以外のラテン語を含めた他の語派で、「覆う」を意味する動詞から「屋根」を意味する名詞が形成されている。ところが、同じ動詞から形成された「衣服」を意味する名詞は、スラヴ祖語とラテン語にのみ発達した。両者が服飾文化において、密接な関係を維持していたことを証しているようである。

ところで、古代ローマでは多様な衣服が着られていたことが、今日ではわかっている。それらの中でもトガはスラヴ語に対応する語彙を見出すことのできる唯一の語である。この事実から、トガの原型が発達した時期が青銅器時代にあったと仮定することができる。もちろん、文献上でトガについての記録が書かれるようになるのは、それよりもはるかに後になってからのことである。

元来、トガは男女ともに着用していたが、早くからローマ市民の男子だけが着るようになったことが知られている (Symons 1987 p. 18; Bonfante & Jaunzems 1988 p. 1404; Paoli 1963 p. 103)。生地は羊毛で織られた半円形一枚布で、長さ 5~5.5 メートル、幅 2~2.5 メートルもあったらしい (Symons 1987 p. 18)。当時は、決まった様式に従って、体に幾重かにゆったりと巻いて着るものであった (Paoli 1963 p. 102)。トガに限らず一般に織りあがった布は、裁断したり、縫い合わせたりはしなかったらしく、襟や袖は付いてなかった (Bonfante & Jaunzems 1988 p. 1386, 1404)。したがって、青銅器時代の機織りの技術があれば、その時点でそのまま衣服として完成していたはずである。もちろん、実際にどれほど古くから、トガと同じような服が着用されていたかは不明である。遅くてもアウグストゥス期には、その後のトガの着用の仕方が確立していたとされる (Bonfante & Jaunzems p. 1409)。

トゥムルス期にドイツのチューリングゲン地方で生活していた女性の衣装の再現図が、ギンブータスによって引用されている (Gimbutas 1965 p. 288)。これは、ライプツィヒの西に位置するシュワルツァ遺跡から発見された女性の墓で、生前の着飾った衣装のままに葬られていたらしい。残さ

れた数々の装身具の状態から、腐食して失われた衣服の形状までも再現されている。そこから明らかなのは、当時は生地を縫い付けることはせずに、織りあがった生地のみで身に付けていた、ということである。したがって、体型に合わせて胸や腰に留めピンで押さえて調節し、袖もまた留めピンで肩のところに刺して付けていたらしい (Gimbutas 1965 p. 258, Harding 2000 p. 375)。全くの推測であるが、このような衣服が少なくとも 500 年程の歳月を経て、ピンを用いない大型のトガに発達したとは考えられないだろうか。

残念ながら、考えられる最古のスラヴ人の衣服が、どのようなものであったかを記す証拠は得られていない。ただひとつ、上の事実と共通しているのは、鉄器時代のポーランドにおけるラウジッツ文化でも衣服の着用に残めピン (12 *bula の項を参照) を多用していたらしいことが、その出土例から知られている (Sedov 2002 p. 74)。ということは、やはり織りあがった生地は、そのまま身に巻きつけるようにまとっていたのかも知れない。接頭辞 *ob-「周りに」の意味は、何かその当時の服の着方を暗示しているかのようでもある。もしそうだとすれば、その当時の原スラヴ人もまた、かつてはトゥムルス期の女性の衣服に類似したものを着用していたのかも知れない。

(9) *rešiti, *rešq 「結び目をほどく、結ぶ」

ロシア語 решить, решу 「(古ロシア語) ほどく」, セルビア・クロアチア語 drešiti 「ほどける」, スロヴェニア語 rešiti 「決める, 解く」, チェコ語 řešiti 「決める」, ポーランド語 rzeszyć 「結ぶ」

// ラテン語 rica 「肩に羽織る布, ショール, スカーフ」, ricinium 「小さいスカーフ」

// アングロサクソン語 wrion 「巻く」// リトアニア語 rišti 「縛る」, raišyti 「結ぶ, ほどく」, ryšulys 「束, 結び目」, ryšys 「リボン」

いずれも機織りというよりは、服飾に関係する語彙である。ラテン語の語義が、かりに想定される原義「女性が頭や肩に掛ける細長い布」に近いとすれば、そこから派生した他動詞はその布を「結んで身に付ける、また

はそれをほどく」ことを意味していた。そして、この動詞がスラヴ語に受け継がれた、と考えられる。リトアニア語では、それらの名詞と動詞が現れていることになる。

ローマの女性の衣装として、頭から長いスカーフを被るというのは一般的であったようである (Symons 1987 p. 24)。もちろん、スラヴ人の中でスカーフを被るのは、はるか昔からの伝統であったにちがいない。先のドイツのシュワルツァ遺跡において再現された女性衣装でも、一人は頭から大きめの頭巾を被り、肩のところをピンで留めていたらしい (Gimbutas 1965 p. 288)。このような女性の衣装の伝統が青銅器時代から受け継がれていったのではないだろうか。

(10) *strojъ「晴れ着, 盛装, 着飾った衣装」, *(ob-)strojiti「着飾る, 身支度する」

ロシア語 строй「列, 様式」, ウクライナ語 стрій「衣服」, スロヴェニア語 stroj「建造」, チェコ語 stroj「器械」, ポーランド語 stroj「衣服」

ロシア語 строить「建設する, 整列させる」, ウクライナ語 строїти「盛装させる」, スロヴェニア語 strojiti「調整する」, チェコ語 strojiti「支度する, 着飾る」

// ラテン語 stria「溝, 柱の縦溝, 衣服の折り目, しわ, ひだ」, strio「柱に溝をつける」

// 古高地ドイツ語 strīmo「線, 筋」// ラトヴィア語 straja「厩舎のわらを敷いた仕切り」

両語派には互いに対応する名詞と動詞の語形がある。どちらの語派においても、名詞は語根に接尾辞を伴わない語幹 *str(o)i- である。他方の動詞は、どちらもそれぞれの名詞から派生した語形であるといえる。スラヴ祖語における名詞の語義は、容易には推定することができない。そこから派生した動詞の意味「着飾る, 支度する」と、ポーランド語の名詞の意味「衣服」から、衣服そのものかそれに関連した意味であったことがわかる。ロシア語における「列」という意味は二次的であり、その衣服のもつ特徴を描写したのかもしれない。そこで、動詞の意味「着飾る」を考え合

わすと、「(儀礼などの)盛装, 晴れ着, 着飾った衣装」という原義が推定されるのではなかろうか。

また, ゲルマン語にも対応する名詞が見られるが, 衣服に関する意味には発達していない。

ところで, ラテン語の名詞は「(柱の)溝」と「衣服の折り目, しわ, ひだ」とを意味する。後者の意味は, ロシア語において二次的に発達した意味の「列」につながる。そこで, スラヴ祖語に推定される意味の「盛装」というのが, 衣服に折り目かまたは筋状のひだをつけて着用することを意味していたのかもしれない。もしかりにそれが正しかったとすれば, その盛装はトガの着用法を思い起こすことになる。

トガは前の晩のうちに, 念入りに必要な折り目をつけて準備していた。それを着たときに, そうしてできた優雅なひだが, 服全体を美しく特徴付ける装飾になっていたのである。トガを着用しない女性もまた, *stola* や *palla* という女性着に優雅でゆったりとしたひだを施して着用していたらしい (Symons, D. J. 1987 p. 24)

もちろん, かつてのスラヴ人がこのトガと同じような衣服を着ていた, とは断言できない。けれども, 体格よりも大きめの一枚布に体型に合わせて折り目をつけ, 要所を留めピンで微調整して着用していた, という可能性は排除できない。

(11) *šija 「頸部<えり<衣服の首周り」(<*siuj-), *(ob-) šijati 「回す」

ロシア語 шея 「首」, セルビア・クロアチア語 šija 「首」, スロヴェニア語 šija 「首」, チェコ語 šije 「首」, ポーランド語 szyja 「首」

セルビア・クロアチア語 (o-)šijati 「ひねる, 回す」

// ラテン語 sinus, -ūs 「衣服を輪にしたときにできる隙間やひだ, 襞になるようにゆるやかに掛けた衣服, またはそれで覆われた胸, 胸に掛かっている衣服のひだ, トガか他の衣服にたるんでできるしわ」

sinuo 「曲げる」

スラヴ語では, 接尾辞を伴わない語幹 *siuj- から形成された名詞である。これと同じ語幹からは, セルビア・クロアチア語に現れているように

動詞も形成されている。他方のラテン語には、接尾辞 *nu- で拡張された語幹の名詞と、そこから派生した動詞が存在する。名詞よりも動詞の語義が互いに近く、原義が「曲げる」かまたは「回す」であったように思われる。名詞はそれぞれの語派で独自に発達したかのようにも思える。けれども、これまでに検討してきた語彙対応の例を見るならば、名詞の語義の点でも互いの関連性があったのではないかと推測することができる。

ラテン語の sinus は、先の toga や stria といった語彙の発達と平行して、使用され始めたことが考えられる。それらと同様に、スラヴ祖語においても *obstega や *strojъ と同じく、もともと *šija は衣服の一部かまたはその特徴を意味する名詞であったのではなかろうか。

ロシア語では、動詞 воротить「曲がる」から名詞 ворот「えり」が形成されたという実例がある。これと同様にスラヴ祖語の *šija は、動詞 *šijati「ひねる、回す」の語幹から形成された名詞であろう。このことから、*šija の語義は、もともと「衣服の首周りを覆っている部分、えり」を意味していたのが、ずっと後に「頸部」だけを指すように変化したと考えられる。

ラテン語の sinus はとくにトガを着用するときに、必然的に現れる特徴であった。大きな一枚布のトガは、身体に幾重にもゆったりと巻きつけるようにして着ていた。この布を正面の右下から左肩越しに背面に回すときに、胸の上にゆったりとたるませて、大きなひだ状の隙間ができるようにしていた (Bonfante & Jaunzems p. 1409, p. 49, Paoli 1963 p. 102)。だが、このような sinus は共和制の末期になってから、衣服の装飾として発達したものらしい (p. 19)。したがって、それ以前の sinus は別の意味を表わしていたはずである。おそらく、別な様式で衣服の頸の周りを巻くように掛けていたのではなかろうか。

このように考えるならば、両語派における名詞の表わしていた原義は、おそらく、「衣服の頸の周りを巻いて覆った部分」を意味していたと推定される。

ただし、われわれの知る限りでは、スラヴ人の伝統にこれと似た様式の衣服の着かたをする例は存在しない。

装身具に関する語彙

(12) *bula, *bulava 「水泡, こぶ, 留めピン」

ロシア語 булава 「球状の頭のついた短い矛, 球のついた権威の象徴としての杖, 留めピン」, ポーランド語 buława 「棍棒」, チェコ語 boule 「こぶ」, ポーランド語 bula 「泡」, スロヴェニア語 bula 「水泡」, セルビア・クロアチア語 bula 「丸いもの, 水泡」, ブルガリア語 bula 「野ケシ」
 // ラテン語 bulla 「泡, 取っ手, お守り, 飾りボタン」
 // リトアニア語 bulis // 古期高地ドイツ語 pūlla 「痘痕」 ドイツ語 Beule 「こぶ」

ラテン語の bulla の -ll- は接尾辞による拡張 (<? *bul-na) ではなく, 二次的に重子音化したものとみなされている (Walde & Hofmann 1982)。そうであるとすれば, スラヴ語の *bula とは母音度の違いを除けば, 全く同形の名詞であったことになる。

意味の発達とその対応には, いくらか説明が求められよう。語形と意味の対応に特別な問題はないと考えられる。しかし, 本来指していたものとそのものの発達が不明確である。青銅器時代の留めピンの名称であった, と考えられるが, それがどのようにしてローマ時代のペンダントを指すようになったのかである。服装の変化が留めピンの用途や使用を制限していったからかもしれない。

原義は解釈しやすい。もとは「丸く膨らんだもの」であったのが, スラヴ祖語とイタリック祖語では, とくに「水泡」を意味するようになった。ここから二次的に「丸く膨らんだ頭のついた留めピン」を同時期に指すようになったのであろう。

古代ローマ時代に bulla はペンダントとして用いられていた (Bonfante & Jaunzems 1988 p. 1400)。子供のうちは, これをお守りのネックレスとして首から掛けていた。ただ, その起源ともとの用途は明らかになっていない。とくに, 留めピンとの関係が指摘されているわけでもない。

トガの上着の衣服は, 古くから青銅製のフィブラかブローチを肩のところで留めていた (Bonfante & Jaunzems 1988 p. 1406)。他方, sagulum または sagum と呼ばれる羊毛の上着は, 肩のところでピン留めしていた

(Symons 1987 p. 21)。衣装の異なる女性の場合は、肩のところで小さなブローチでピン留めしていた (Symons 1987 p. 24)。

青銅器時代の遺跡から、留めピンはよく発掘されてきた遺物である。すでにウーニェティツェ期初頭から衣服を留めるためのピンは発見されている (Childe p. 282; Gimbutas 1965 p. 253, 256)。

青銅器時代のトゥムルス期には、すでに多種多様なピンが作られていた。服を留めるという単に実用的な用途だけでなく、主にその頭の部分に装飾を施すことで装身具としての役割も果たしていた。そのとくに頭の部分の形状が、時代と地域によってかなり異なっていたと各所で指摘されている (Briard 1979 p. 106, 179, 181, 187; Gimbutas 1965 p. 268, 276-277, 289-290; Childe p. 282, 437-443)。たとえば、円盤状の頭のついたピン (Gimbutas 1965 p. 255)、輪のついたピン、穴の開いた球のついたピン (Gimbutas 1965 p. 271)、釘や車輪状の頭のついたピン (Gimbutas 1965 p. 269)、様々な文様の施された樽状のピン (Gimbutas 1965 p. 290)、ケシのつぼみ状の頭がついたピン (ブルガリア語の語義を参照; Briard 1979 p. 181-183) などがあった。これらはいずれも、基本的には丸い形状を基本に形を変えていることがわかる。

とくに、女性の場合は肩と脇などをピンで留めていたことが、出土状態からも推定することができる (Gimbutas 1965 p. 258, Harding p. 375)。別のトゥムルス期の女性の墓からは、肩で頭から被るスカーフをピン留めし、袖も縫いつけずに肩でピン留めしていたことがわかる。

セドフは、ポーランドにおける鉄器時代のラウジッツ文化期の留めピンとポトクリョシュ文化の留めピン (Sedov 2002 p. 62, 75) とを図示している。いずれも比較的単純であり装飾が施されていない。このポトクリョシュ文化で用いられてきた留めピンは、紀元前1世紀のプシェヴォルスク文化期にはケルト的なフィブラに代わってしまった (Sedov 2002 p. 90)。したがって、ここでも留めピンの使用はかなり制限されてしまったわけである。

ロシア語 *монисто* 「首飾り」、マケドニア語 *monisto* 「ビーズ」
 // ラテン語 *monile* 「首飾り、たてがみ」
 // アイルランド語 *muinēl* 「首」// 古期高地ドイツ語 *menni* 「首飾り」
mana 「たてがみ」// ギリシア語 *mannon* 「首飾り」// 古代インド語
manyā 「首筋」

ラテン語の接尾辞 *-ile* は、スラヴ祖語の接尾辞 **-isto* と一見全く別物のようである。けれども、ラテン語では *pāla* が **pastla* から変化した形であることが、*pastinum* という語の存在から知ることができる (Walde & Hofmann 1982 p. 236)。もし、これと同様の音変化 (**il-* < **istl-*) が生じたのだとすれば、**mon-istle* から代償延長を伴って *monile* に変化したと想定することもできる。そうすると、スラヴ語と接尾辞 **-ist-* を共有することになり、形態面ではかなり近づく。

語根の **mon-(i)-* の原義は「頸」であった。これが「首飾り」を意味する語に発達したのは、スラヴ、イタリック、ゲルマンの語派に限られる。ただし、ゲルマン語の古期高地ドイツ語の *menni* 「首飾り」には、接尾辞 **-ist-* による拡張が見られない。

この装身具を表す名詞は、もちろん、機織りと直接的な関係はない。ただし、服飾に関する語彙としては、全く無関係とまでは言えない。当時の機織りの技術的発達、衣服に対するお洒落の感覚を養い、それがさらに装身具にも関心が向けられるようになったのであろう。

12. 共通語彙の現れ方

以上の通り、スラヴ語とラテン語との間には、紡織と服飾に関する共通語彙がさらに13例あることを確認することができる。かつてトゥルバチョフが検討した例に加えると、全部で22例になる。かりに、何らかの理由で疑問が残る数例 (4 **ligati*, 6 **blizna*) を除外したとしても、共通語彙の数は少なくはないと言える。

上記の例は、スラヴ語から見てイタリック語派のラテン語には一貫して対応するものの、ギリシア語、バルト語などにはそのような一貫性が見ら

れない。また、実際にそのような対応例があったとしても、語義の面では離れていて、ラテン語の語義との間の対応のほうが、より近いことに注目される。

ところで、トゥルバチョフは形態論的な側面から見ても、厳密に接尾辞まで一致している例を中心に集めたのであった。他方で、本論で検討した対応例には、接尾辞が多少とも異なっているものも含まれたのであった。こうして、検討対象の範囲を広げたとしても、スラヴ語における紡織と服飾関係の共通語彙が、ラテン語との間に偏って見られるとすることができる。

以上のような史的・比較言語学的事実は、かつてスラヴ祖語がラテン語の源となるイタリック祖語との間で、一時的にせよ密接な言語接触が生じていたことを如実に表わしている。それと同時代に、同様の関係はスラヴ祖語とゲルマン祖語との間にも見られたはずであるが、イタリック祖語と比してそれほど強くはなかったのかもしれない。

他方で、一般にスラヴ語との関係がもっとも近いとされるバルト語には、紡織と服飾関係の共通語彙が、少なくともラテン語と共有する形では現れないという点は特筆に値する。この事実は、トゥルバチョフも指摘している通りである (Trubachev 1966 p. 392-393)。スラヴ祖語がイタリック、ゲルマン祖語との間に言語接触が生じていた当時の青銅器時代に、バルト祖語とはほぼ断絶状態が続いていたことを意味する。このような言語学的事実は、当然、スラヴ祖語の原郷地の議論に導かれることは、先に触れたとおりである。言語学的な視点から結論付けられることは以上の通りである。

13. 紡織文化の由来

考古学的な視点からも、言語学的な結論付けと同様なことが言えよう。セドフの説に照らし合わすならば、青銅器時代において原スラヴ人は、トゥムルス文化の一端を担っていたことになる。その当時の原スラヴ人の居住地を特定することはできそうもないが、おそらくシレジア地方以南、カル

パチア山脈よりは南西側のいずれかの土地に居住していたと言えそうである。

トゥムルス文化には、イタリック祖語を話していた集団もまた属していたことが知られている。したがって、原スラヴ人は原イタリック人と同一の文化圏内において、言語と文化の両面で接触していたと考えられる。そして、まさにその当時、彼らのもとで機織りの技術、文化が高度に発達したのであろう。それに伴ない、両語派の言語において、新たに必要になった共通の紡織関連の語彙が形成されたと推測される。それぞれの言語は独立して発達していたが、それらの語彙は同一かまたは、異なる接尾辞によって形成されることもあった。

トゥムルス文化の前後に連続する青銅器時代においては、機織りの技術ばかりが発達したのではなかった。同じ時期におけるそれ以外の文化面での発達を裏付けるような、語彙的な証拠が両語派の間に見られることが期待される。その論証は、今後の課題として残しておきたい。

参考文献

- Barber, E. J. W. 1990: *Prehistoric textiles*. Princeton University Press.
- Barber, E. J. W. 1975: "The PIE notion of cloth and clothing," *Journal of Indo-European Studies*, Vol. 3, No. 4, pp. 294-320.
- Bonfante, L., Jaunzems, E. 1988: Clothing and Ornament. *Civilization of the ancient Meditaraenian, Greece and Rome* Vol. 3 (Ed. by M. Grant, R. Kitzinger) Charles Scribner's son N.Y. pp. 1385-1413.
- Briard, J. 1979: *The bronze age in barbarian Europe, from the Megaliths to the Celts* (Translated by M. Turton) Routledge & Kegan Paul, London.
- Childe, G. 1976: *The Danube in prehistory*. AMS Press. New York.
- Gimbutas, M. 1965: *Bronze age cultures in central and eastern Europe*. Mouton, Paris.
- Glare, P. G. W. (Ed.) 1982: *Oxford Latin dictionary*. Clarendon Press, New York.
- Harding, A. F. 2000: *European society in the bronze age*. Cambridge University Press. New York.
- Leumann, M., Hofmann, J. B., Szantyr, A. 1972: *Lateinische Grammatik*.

- Beck, München.
- Paoli, U. E. 1963: *Rome Its people life and customs*. Longmans. Aberdeen.
- Renfrew, J. M. 1973: *Palaeoethnobotany*. Methuen. London. p. 120-124.
- Soffer, O., Adovasio, J. M., Hyland, D. C. 2000: "The "Venus" figurines" *Current Anthropology* Vol. 41, No. 4, pp. 511-537.
- Symons, D. J. 1987: *Costume of ancient Rome*. Chelsea House Publishers, N.Y.
- Trubachev, O. N. 1985: "Linguistics and ethnogenesis of the Slavs: The ancient Slavs as evidenced by etymology and onomastics" *Journal of Indo-European Studies*, Vol. 13, No. 1/2, pp. 203-256.
- Walde, A., Hofmann, J. B. 1982: *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*. Bd. 1-2. Carl Winter, Heidelberg.
- Zohary, D., Hopf, M. 1988: *Domestication of plants in the Old world*. Clarendonpress, Oxford. pp. 114-121.
- Sedov (Седов, В. В.) 1979: *Происхождение и ранняя история славян*. Наука, Москва.
- Sedov (Седов, В. В.) 2002: *Славяне. Языки славянской культуры*, Москва.
- Trubachev (Трубачев, О. Н.) 1966: *Ремесленная терминология в славянских языках*. Наука, М.
- Trubachev (Трубачев, О. Н.) 1975: «Несколько древних латинско-славянских параллелей» *Этимология* 1973, Наука, Москва, с. 3-16.
- Trubachev (Трубачев, О. Н.) 1982: «Языкознание и этногенез славян. Древние по данным этимологии и ономастики» *Вопросы языкознания* 4, с. 10-26.
- Vasmer (Фасмер, М.) 1986: *Этимологический словарь русского языка*. Москва.
- ESSJa: *Этимологический словарь славянских языков т. 1-*, 1974-. Наука, Москва.

(受理日 平成18年11月8日)